

いきいき

VOL 18号
平成21年2月12日
いわき市総合教育センター

■講演 「発達障がい特性を生かした社会的自立」

(講師 大阪教育大学 竹田 契一名誉教授)より No.3

- 特別支援教育だより「いきいき」では、昨年末の16号からLD・ADHD等講座の講演の概要をお知らせしてきました。今回は前回に続き、ADHD児の行動について考えていきたいと思います。

竹田先生は、次のように説明されました。

優先順位をつけることが苦手であるため、計画を立てたり、見通しをもって行動したりすることができにくい傾向がある。全体を統合する力も弱いため、二つ以上のことを同時に処理することや、整理整頓をすることも苦手である。これらは「暗闇の中で懐中電灯を照らしているように、照らした所しか見えず、その周辺が見えにくい状態」に似ていると言われる。

この状態をより助長してしまうこととして、次のようなことも考えられる。

- 1 学力不振
- 2 不安定な家庭環境（特に6歳までの環境）
- 3 自尊感情の低さ。
- 4 幼児期の虐待体験
- 5 一貫性のない、その場限りの対応
- 6 差別的に接する級友
- 7 子どもを理解しようとしめない担任



以上のようなことをふまえ、その子の実態を的確につかんで対応することが大切である。

対応が適切でないと、反抗挑戦性障がいと言われる次のような行動を示すこともある。

- 1 相手に口論を仕掛けたり、暴言を吐いたりする。
- 2 相手の要求や規制に対して、あえて拒否する。
- 3 故意に相手を苛立たせる。
- 4 自分の失敗や振る舞いを他人のせいにする。
- 5 執念深く逆恨みする。

その他にも、子どもが幼少期にネグレクトや虐待等を受けるなど、愛情飢餓や情緒的に不安定な状況の中にあると、ADHDでなくてもこのような状態に似た症状が出てくることがあると言われる。

親が子どもと接するときに、特に注意しなければならないのが、子どもの存在を否定してしまうような言動である。冗談でも「お前なんか生むんじゃなかった。」などと言われてしまうと、子どもは自分の存在に自信をなくし、「どうせ自分なんか・・・」等、自虐的な言葉を吐くようになり、中には、非行や犯罪に走ってしまうケースさえある。

今回は、周囲の関わり方について掲載し、考えていきたいと思います。また、「いきいき」についてご意見、ご質問等があれば総合教育センター松崎（E-mail matsuzaki-n@city.iwaki.fukushima.jp）までご連絡ください。